リスク関連情報により生じた気分の危険性推定への影響

— 新型インフルエンザと災害の比較 —

○佐藤重隆¹・北村英哉²

(¹ 東洋大学大学院社会学研究科・² 東洋大学社会学部)

キーワード: 感情・リスク認知

Influence of mood states caused by risk relevant information on risk estimates: Comparing H1N1 influenza with disaster.

Shigetaka, SATO¹ Hideya KITAMURA²

(¹ Graduate School of Toyo Univ., ² Toyo Univ.)

Key words: affect, risk perception

目的 リスクの推定と感情の関連について Johnson & Tversky (1983) はネガティブな感情状態がリスクの認知を高めることを示した。しかし、扱われた刺激は致死性の高いものだった。本研究では、09 年に流行した新型インフルエンザと災害の刺激を用いて、比較を行うことにより、気分の生起原因の違いと刺激に応じて生じた気分の程度が危険性の推定にどう影響するかを新聞記事を刺激として集団での質問紙実験で検討した。

実験 1 方法 参加者: 106 名。実験計画: 1 要因 (新聞記事: 災害 (ハリケーン) / 新型インフルエンザ/ニュートラル/ポジティブ) 4 水準の被験者間計画。手続き: 09 年 7 月の講義時間中に実施した。参加者には冊子状になった質問紙を配布した。質問紙は 2 つの部分に分かれており、最初には刺激となる新聞記事と記事に対する評価と操作チェック (快・不快項目×2/不安/悲しみ) の項目 (8 項目 7 件法) と災害 (地震・洪水・台風) と新型インフルエンザへの対策に関する評価と危険性推定の質問紙 (すべて 6 件法)・フェイスシートの順でまとめられていた。対策への評価と危険性推定の項目はカウンターバランスがとられた。手続き: 参加者には冊子を配布し、最初に 5 分間記事を読む時間を与え、その後新聞記事への評価を含めた質問項目に回答するように指示した。全員の回答が終了したことを確認し、デブリーフィングを行い、実験を終了した。時間は 30 分だった。

実験 1 結果 回答に不備のあった参加者を除外し 99 名 (男性: 43 名、女性: 56 名、平均年齢 21.2 歳) を分析対象とした。操作チェックの項目について分散分析を行った結果、有意な効果が得られた ($F(3, 95)=4.36, p<.01$)。多重比較から、それぞれの得点でポジティブ記事条件とリスク刺激の 2 条件の間には想定された差が得られ、実験操作の成功を確認した。まず刺激の効果について回答させた災害と新型インフルエンザの危険性について分散分析を行った結果、地震と台風の危険性推定で効果の傾向 ($F(3, 95)=2.40, p<.08$)、洪水の危険性推定で有意な効果が得られた ($F(3, 95)=4.36, p<.01$)。多重比較から、地震と洪水の危険性については有意な差が得られ、地震ではポジティブ記事条件と新型インフルエンザ記事、洪水ではポジティブ記事とニュートラル記事で差があり、ともにポジティブ記事条件が高かった。気分として不安の効果について検討するため、重回帰分析を行った。2 つのリスク関連記事のダミー変数と標準化した操作チェックの不安の項目およびそれぞれの記事変数と不安得点の交互作用項目を変数として投入し (強制投入法)、新型インフルエンザと地震・台風・洪水の危険性推定をそれぞれ従属変数として重回帰分析を行った。その結果、新型インフルエンザの危険性 (調整済み $R^2=.05, p<.09$) に関しては新型インフルエンザ記事と不安の交互作用項のみ有意となった ($\beta=.35, p<.01$)。また、地震の危険性 (調整済み $R^2=.06, p<.05$) に関しても同様に災害記事と不安の交互作用項のみが有意となった ($\beta=.29, p<.05$)。この結果から不安感の効果は原因となる刺激と推定の対象により異なることが示唆された。

実験 2 方法 参加者: 172 名。実験計画: 1 要因 (新聞記事: 実験 1 と同様) 4 水準の被験者間計画。実験 1 のニュートラル刺激は長さの問題から変更した。さらに、災害への対策の項目を削除し、新型インフルエンザの対策に対して精神的・身体的・経済的負担と効果を

評定させた (6 件法)。新型インフルエンザの危険性については危険性と感染して死亡・重症化する確率を推定させた。また、新型インフルエンザなど 8 つのリスクへの関心を評定させた (6 件法)。手続き: 09 年 12 月の講義時間中に実施した。参加者には 2 種類の調査を行うことを説明し、最初に新聞記事に関する調査を行いその後、別の質問紙への回答を求めた。最初の新聞記事は実験 1 と同様 5 分間読む時間を与え、その後記事の評価に関する項目に回答するよう指示した。新聞記事に関する質問紙に回答している間に新型インフルエンザの危険性の推定の質問紙を配布した。全員の回答が終了したことを確認してデブリーフィングを行った。時間は 30 分だった。

実験 2 結果 回答に不備のあった参加者を除外し 166 名 (男性: 52 名、女性 114 名、平均年齢 19.7 歳) を分析対象とした。実験 1 と同様、操作チェックを行った結果、実験 1 同様の有意な効果 ($F(3, 162)=4.39, p<.01$) 及び多重比較の結果が得られ、実験操作の成功を確認した。提示された 4 つの記事の影響について新型インフルエンザの 3 つの推定を従属変数として分散分析を行った結果、危険性推定で有意な効果 ($F(3, 162)=4.39, p<.01$)、死亡可能性の推定では効果の傾向が得られた ($F(3, 162)=2.53, p<.06$)。多重比較から、危険性推定のみポジティブ記事とニュートラル記事の間で有意な差が得られ、ポジティブ記事条件での評定が最も高かった。不安の効果を検討するために新型インフルエンザに関する 3 つの推定を従属変数として重回帰分析を行った。死亡可能性推定 (調整済み $R^2=.06, p<.05$) と重症化可能性推定 (調整済み $R^2=.11, p<.05$) でそれぞれ有意なモデルが得られた。死亡可能性推定では新型インフルエンザと不安の交互作用項でのみ係数が有意となった ($\beta=.29, p<.05$)。また、重症化可能性推定においては新型インフルエンザと不安の交互作用項に加え ($\beta=.34, p<.01$)、災害記事と不安の交互作用項においても係数が有意となった ($\beta=.20, p<.05$)。以上の結果から研究 1 同様に新型インフルエンザに関する記事で生じた不安感は危険性に関する推定に影響することが示唆される結果が得られた。

考察 本研究の 2 つの実験の結果は刺激の違いによるネガティブな感情状態の認知への効果は刺激と一致した対象への評定でその影響があることが示唆された。この結果は特にネガティブな感情状態において、その原因と生じた感情の程度と評価の対象の関連により感情の影響がことなることを示唆するものであり、現在までに多く行われている感情と認知の関連の研究において重要な知見である。また、記事の直接的な効果に関しては仮説通りの結果が得られず、ポジティブ記事で最も高い評価が行われていた。これは Johnson & Tversky (1983) の研究とは結果が一致しなかった。可能性としてポジティブ気分状態での認知処理は簡便な処理になるため、危険性の推定において対象が危険であることが明確である場合にはより高い評定を行ったことが考えられる。結果から、ネガティブな内容の記事との間には差がなかったことから、両者の認知過程の違いについてはより詳細な検討の必要性がある。また課題として、集団での実施など手続きの問題もあり、より精緻な計画で研究を行う必要がある。

引用文献: Johnson, E. J. & Tversky, A. (1983). Affect, Generalization, and the Perception of Risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45(1), 20-31